ハイスクールD×D ~兵藤家の妹?~

秘密の君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハイスクールＤ×Ｄ　~ 兵藤家の妹？~

【Ｎコード】
Ｎ６８３４Ｚ

【作者名】
秘密の君

【あらすじ】
兵藤家に妹がいたらどうなっているのか、と妄想して書いてみました。処女作なので、至らぬ点が多く、お見苦しい部分も多いと思いますが、どうぞよろしくお願いします。

１．とある兄妹の朝の風景（前書き）

はじめまして。秘密の君です。

今回は、今まで妄想どまりだったネタを使ってみたく始めました。
更新はなるべく早く書くようにします。
主人公は兵藤　毬（１６）です。

それでは、私が作り出した「ハイスクールＤ×Ｄ」の世界をお楽しみください。

1．とある兄妹の朝の風景

「眩しぃ・・・」
私はベッドの上でつぶやいた。朝日がとても眩しい。
とりあえず、ベッドから降りていつも通りお兄ちゃんを起こしに行く。
お兄ちゃんの部屋のドアを開け放つ。
「お兄ちゃ～ん。あっさだよ～。」
「ん～・・・。あと5時間。」
「学校遅れるよ～。」
反応がない。
「仕方がないな～。」
そう言って私は部屋のいたるところに隠してあるエロ本を取り出し、
「さて、捨てよう「今起きたすぐ起きた！！だからご慈悲を～（泣）」
いつもこうやらないとお兄ちゃんは起きないんだよね（笑）
「わかったから、なかないでよ～お兄ちゃん？」
私はウインクしながら言う。そうするとお兄ちゃんは安堵の息を吐いて
「いつも思うんだが、毬はどうやって見つけてるんだ？」
「ふっふっふっ。お兄ちゃんの隠し事なんて私の前では無意味なのだよ！」
「な、なんだって－！！」
実は、盗聴器と隠しカメラを設置しているだけなんだけどねー。そうとは知らずに
「何ということだ・・・。では、どうすれば・・・。ぶつぶつ・・」
と、お兄ちゃんはつぶやいている。
「早くしないと遅れるよ～。」
「あぁ、そうだな。」

と、お兄ちゃんと一緒に一階に降りる。あ、そうだ。
「お兄ちゃん。今度の休日買い物つきあってくれない？」
「あ～。ごめん！俺その日デートがあって・・・。」
ビシッ。と、私の周りの空気が凍る。そうとも知らずお兄ちゃんは話を続ける。
「いや～。この前告られてさ。すっっっっっっっげぇぇぇ嬉しくて即ＯＫ出しちゃったよ。ハハハ。」
お兄ちゃんはすごくうれしそうだ・・・。・・・うん。決めた。
「その人の名前教えてくれないかなお兄ちゃん。」
「ええっとな、天野　夕麻ちゃんつうんだ。」
ふ～ん。ちゃん付け・・・。よし。
「殺そう。」
「いきなり何言ってんだ！？」
しまった。つい声に出してしまった。
「大丈夫だよ。その人とは永久に会えなくなるだけだから。」
「いやいやいや。大丈夫じゃねーだろ！？落ち着け早まるな！」
「お兄ちゃんをたぶらかす悪魔に死の鉄槌を・・・」
「頼むから、頼むから落ち着いてくれ！俺の初恋なんだ。奪わないでくれ！頼むから！」
私はその言葉に泣きたくなった。
「うぅ・・・。」
「えっ！？あ～。ごめんな・・・。（よくわからんが謝るのが吉とみた！）」
「ぐすっ・・・。・・・お兄ちゃんはその人のこと大好き？」
「え？あ、あぁ。」
そんなに思ってるんだ。じゃあ仕方ないね・・・。
「うん。わかった。少しパニクっただけだから・・・。」
「そ、そうか（元気なくなってるな・・・そうだっ！）じゃあ今度一緒に買い物行こうぜ！」
「えっ？」

「だからさ元気出してくれよ。な？お前が悲しそうなの見たくねえんだよ・・・。（理由はわからんが・・・。）」
たぶん、原因が自分だって気付いてないんだろうな・・・。でも・・・
「うんわかった。」
心配してくれたし嬉しいからいいっか。
「でも、譲りはしないからね・・・。」
だったら、こっちに振り向かせるまでのこと！！
「ん？なにぶつぶついってるんだ？」
「な、なんでもない！（汗）」
「？」
よかった気付かれなかった。
「さてそろそろ行くか。」
「あっ。待ってお兄ちゃん！」
そうして私たちは学校へ向かった。
私たちの運命の歯車はこの日を境に狂ってしまった。

1．とある兄妹の朝の風景（後書き）

毬「少し…寂しいな。」
君「まぁ。落ち着いて。」
毬「で、次回はお兄ちゃんと彼女さんのデートの話なんだよね？」
君「さぁてね。（怪しい笑み）」
毬「え！？違うの！？どうなるのよーー！？」
君「次回、『闇に伏せる兄妹』お楽しみに」
毬「こたえろーーーー！」

2．闇に伏せる兄妹（前書き）

さて、2話目です。
そこまで進んでいません。
できたら、感想などをお願いします。

2．闇に伏せる兄妹

学校前、いつもどおりにお兄ちゃんと登校していると、
「よう！一誠。」
「おはよう。一誠。」
「よっ。」
「おはようございます。」
いつもお兄ちゃんとつるんでエロ三人組と呼ばれる人たちだ。
「一誠。エロＤＶＤ貸してやるよ。約束だっただろ？」
そう言って、鞄からＤＶＤを堂々と白昼にさらす。
この品性が感じられないこの丸刈り頭はお兄ちゃんの友人の松田君。
まぁ、よく騒ぐ人だ。
・・・悪い意味で。
「今日は風が強くてロリ少女のパンチラが拝めた・・・。生きててよかったよ。」
と言って、中指で眼鏡をずり上げる。
人間として危ないと思うこのカッコつけて話しかけてきたのはこれまたお兄ちゃんの友人の元浜。
メガネを通して女性を見ると体型を数値化できるらしい。
私もされそうになったことがあったな。もちろん、瞬殺したけどね。
実は、私は運動神経抜群なんだよね。陸上部の男子に短距離走で勝ったこともあるし。
「あぁ。いいやいらね。」
「なんだと！？エロさＮｏ．１のお前が・・・体調悪いのか！？」
「そうだぞ？お前おかしくなったか？」
「ちげぇよ！！彼女ができたから要らんつーただけだ！」
「「・・・」」
二人が黙ってしまった。あ、耳ふさいどこ。
「「な、何だとーーーー！！！！」」

ふさいでてもこの威力。どっからそんなに声が出てくるのだろうか？
お兄ちゃんは・・・あ、くらくらしてる大丈夫かな？
「ばかな！エロさＮｏ．１のお前がそんな馬鹿なーー！！」
「神はいない。神はいなくなってしまったんだ・・・」
と二人ともｏｒｚ状態になってしまった。
信じたくないんだろうな。あ、教室ついたし授業の準備しよ～っと。
「まぁ、負け組は負け組らしく吠えてやがれ。はっはっはっ。」
「「死ね！！！」」
廊下で騒いでいる。うるさいなぁ。
さてと授業授業っと。

～休日～

お兄ちゃんのデートをつけてみたけど、お兄ちゃんの彼女は意外にもかわいい子だった・・・。
確かにあれなら惚れても仕方ない気がする。
お兄ちゃんのこと奪えるかなぁ・・・。
あれ、公園に入った。何するんだろう？
・・・はっ！まさかキス！？それは許さん私が許さん！
私は公園の茂みに隠れてすぐに妨害できるように準備した。
二人の声が聞こえてくる。
「ねぇ、死んでくれないかな？」
・・・は？何言ってるのあの子？私の聞き間違いかな？
お兄ちゃんもそう思ったらしく、
「・・・え？　その・・・あれ？　ゴメン、もう一度言ってくれない？　ちょっと緊張してて聞き取れなかったよ、はっはっは」
「死んでくれないかな？」
バサッ

お兄ちゃんの彼女の背中に黒い翼が生える。
まるで、黒い天使の翼みたいなものが。
そう考えていると彼女の手に光る槍？のようなものが握られていた。
それを無造作にお兄ちゃんに投げつける。

グサッ

お兄ちゃんのおなかにその光る槍が刺さる。
「「えっ？」」
お兄ちゃんの声と私の声がハモる。
私は自分でも気付かない間にお兄ちゃんの近くに駆け寄っていた。
「お兄ちゃん・・・？」
返事がない。
お兄ちゃんのおなかから赤い液体がドクドクと流れ出る。
「いっ、嫌ーーーーーーー！！！」
「あら？あなた彼の妹さんだっけ？」
夕麻という彼女が話しかけてくる。
ふざけるな・・・。
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな
ふざけるなふざけるなふざけるなふざけるなふざけるな

「ふざけるなぁーーーーーーー！！！」
お兄ちゃんの・・・敵！！！

私は飛びかかろうとする。
「殺す・・・。殺してやる！！」
「あはっ。残念、それ無理。」
彼女は笑顔でそう言い光の槍を投げつけた。
かわせない。

グサッ

「ごふっ・・・。」
やられた・・・？でも、倒れない。倒れてやらない！
「あら？立っていられるなんてすごいわね。でも、もう無理でしょ？うふふ。」
そう言って彼女は闇の中に消えていった。
その声を聞いて私の意識は遠のいた。
その瞬間、私の視界に紅の髪が入った。
そして声が聞こえた。

「死にそうね、傷は・・・へぇ、おもしろいことになっているじゃないの。あなたたちがねぇ・・・。おもしろいわ」

意識はそこで遠のいた。
そして私はその日、人間の死を迎えた。

2．闇に伏せる兄妹（後書き）

毬「え！？死んじゃったよ！私達死んじゃったよ！？」
君「そうだね～。（にやにや）」
毬「え？何？何なの？」
君「まぁ、次回を楽しみに・・・。」
毬「すごく気になるのにーー！」

3．兄と妹との魔の道（前書き）

さて、一日の内に三話目を更新することができました。

まぁ、いつもの如くあまり進んでないんですがね。

明日にはオカルト研究部のところまで行きたいな・・・。

3．兄と妹との魔の道

マリｓｉｄｅ・・・

「う・・ん・・・。」

私は目覚まし時計の音で起きた。

いつもはすぐにおきれるのに、近頃は朝がめっぽう弱くなった。

何でだろう？

「さてと、ほんとに起きないと。お兄ちゃんも朝がさらに弱くなったし。」

そう呟きながら、私はお兄ちゃんの部屋へ向かった。

昨日はエロ三人組のメンバーと一緒に何かやっていたらしい。

何をやっていたかは簡単にわかってしまうのが少しかなしいけどね・・・。

ずいぶんと夜遅くまでいたらしいからいつ帰ってきたかわからなかった。

「おっはよー。お兄ちゃん？」

私はお兄ちゃんの部屋のドアを開け放った。

そして見てしまった。

裸のお兄ちゃんと紅髪の女性を。

イッセーｓｉｄｅ・・・

き、聞いてくれ！俺酒飲んだりしてなかったはずなんだ。（当然の如く）

それなのに、隣に俺の憧れの女性、リアス・グレモリー先輩が寝ていたんだ！

う、嘘だろ・・・。記憶にないのに俺は初体験してしまったのか！？

「な、何たる不幸・・・」
「ん・・・」
あぁーーー！どうしよう！
「んー・・・。あら、あなたもう起きてたの？」
っ！！お、お姉さま！お胸が見えていらっしゃるのですが！？
俺は毛布で下半身を隠しながら床に座った。
「あ、あの、お胸が見えていらっしゃるのですが？」
「あら、見たければ見てもいいわよ。」
っ！！なん・・・だと・・・。
日本語にそんな素敵な言葉があったのか！？
鼻血が出そうだ。
「で、でもなぜここにいるのですか？」
「あなた、昨日のこと覚えてない？」
え？昨日のこと？
確か、悪友二人と一緒にエロＤＶＤを一緒に見てて、なぜ俺らに彼女ができないのか、という話になり時間が遅くなって、一人で帰り道を歩いていて・・
「確か、変な男とあって・・・そうだ！夕麻ちゃんと同じような翼が生えていて、俺の腹に光の槍みたいなものを・・・。って、あれ？傷は？」
「私が駆け付けなかったら、あなたは今頃無となっていたわよ。傷は深かったから私がここまで運んで魔力で治してたってわけ。」
「そ、そうなんですか？て言うか何で裸なんですか？それにあの男は何者なんですか！？」
「えーと。まず前者の質問。魔力が裸のほうが渡しやすいため。で、後者の質問は、あいつらは堕天使。
欲に負けて天使から堕ちたもの達よ。」
な、何を言ってるんだこの人は！？
「まぁ、詳しいことは学校で話すわ。後で使いを出しておくから。」
先輩がそういった瞬間俺の部屋のドアが開け放たれ、

「おっはよー。お兄ちゃん？」
と言いながら毬が入ってきた。

ビシッ

その瞬間、空気が凍った。
リアス先輩は気にしていない様子だが毬のほうからドス黒いオーラの様なものが、
（や、やばい・・・。）
俺は滝のように冷や汗をかいている。
「お兄ちゃん。かのひとはだれかなぁ～？そして何をしていたのかなぁ～？（怒）」
「ひっ。い、いや毬落ち着け。な？」
「私はリアス・グレモリー。あなたたちと同じ私立駒王学院の三年よ。それに裸で抱き合っていただけよ。」
せ、先輩！色々とはしょり過ぎです！
あぁ、毬からさらに黒いオーラが！

「こんの・・・。どろぼうねこがぁーーーーーーーーーー！！！！」
ま、毬が先輩に襲いかかっている！危ない！！

ヒラリ。
「へぶっ」
おぉ、先輩は華麗にかわしている！
そして毬はベッドに頭から突っ込んでいるぞ！
「あなたたちに言っておくわよ。」
「何だ！この泥棒猫！！」
「お、落ち着け毬！」
俺は毬を羽交い絞めにした。そうしないといつ飛びかかるかわから

ないからな。
先輩は制服に着替えた後、驚くべきことを言った。
「あなたたちは、一度死んでるわ。転生して悪魔になったのよ。」

3．兄と妹との魔の道（後書き）

毬「何よこの泥棒猫！！ガルルル・・・」
君「ま、まぁ。落ち着きたまえ。（ダラダラ）」
毬「お兄ちゃんの貞操を・・・許さない・・・。」
君「まぁ、あまりにも怖いので次回予告『悪魔達の喧騒』」
毬「お楽しみに？　あの女・・・ぶち殺しかくていね♪」
君「ひぃっ」

4．悪魔達の喧騒（前書き）

さてついに毬の神器が姿を現しました。

いつもより多く描いたの絵少し疲れています。

今日中にもう一話いけたらいいな～

4．悪魔達の喧騒

マリｓｉｄｅ・・・

・・・は？
何を言ってるのこの人？頭がおかしくなったの？
お兄ちゃんもどう反応すればいいのかわからないのかポカンとしている。
私たちを気にせずにリアス先輩は、
「まぁ、さっきも言ったけれど、詳しいことは学校でね。」
と、言いながら鞄を持つ。
「あなた達、早くしないと遅れるわよ。」
あ・・・、
「ヤバい！早くしないと遅れちゃうよ。お兄ちゃん！」「お、おう！そうだな。」
そういいながら、私たちは急いで準備をする。
この後、一階でお母さんとお父さんが騒いだのはいうまでもない。
「「いってきまーす。」」
そう言って、私たちは玄関から飛び出ていった。
・・・あの泥棒猫もいたけど。

～学校～

まぁ、登校中もいろんな人が騒いでいた。
エロ三人組のメンバーの二人ももちろんからんできた。
お兄ちゃんはその二人に意味ありげな笑顔で、
「なぁ、生乳って見たことあるか？」
と言っていた。
あの女・・・。

どうしてくれようか・・・。
そうだなぁ、まずは気絶させてそこから色々と世間に公表できないようなことをしまくって・・・。
「セメント・・・太平洋沖・・・沈める・・・ブツブツ・・・」
「お、おい毬さん？どうしてそんな危険なフレーズをつぶやいているのでせうか？（ビクビク）」
あれ？気付くと私の周りからみんな2メートルくらい離れてこちらを見ている。
お兄ちゃんもその中にいたので、
「どうしたのお兄ちゃん？」
私は最上級の笑顔で聞いてみる。
「あ、あぁ。よかった。いつもの毬だ・・・。」
とお兄ちゃんは、安堵の息をついている。
どうしたのかな？
そのまま学校に着いた。
あの泥棒女はさっさと行ってしまっていなくなってたんだけどね。

イッセーｓｉｄｅ・・・

さっきの毬は阿修羅に見えてしまった。
本当に怖かったな・・・（汗）
まぁ、そんなこんなで今は放課後になってしまった。
先輩が言っていたことが気になって、授業がまともに頭に入らなかった。
しばらく待つと、
「兵藤　一誠君と、毬さん。いるかな。」
声のしたほうを向くとうちの学校で人気のイケメン木場　祐斗がたっていた。
うちのクラスの女子がいろいろと騒いでいる。
「「「「「キャー！木場くぅぅぅん！」」」」」

くそっ、イケメン死ね！！
俺はとりあえず木場のもとへ向かった。

マリｓｉｄｅ・・・

木場という人が私たちを呼んでいた。多分、リアス先輩の使いとは彼のことなのだろう。
お兄ちゃんは、
「何のようだ。」
と実に、不機嫌そうに木場君に話しかけた。
お兄ちゃんはイケメン嫌いだからね～。
木場君は気分を害した様子はなく、
「えぇとね、リアス・グレモリー先輩の使いで「ＯＫ、ＯＫ。すぐ行くよ」
お兄ちゃん・・・。そこまで先輩のことがいいのかな？
どうすればいいかな・・・あの女からこっちに振り向かせるためには？
とりあえず、木場君の後をついて行くと、
「汚れてしまうわ、木場君！」
「木場君×兵藤なんてカップリングは許せない！」
「あの女木場君と・・・ブツブツ」
と、腐った視線と殺意がこもった視線が私たちに向って放たれている。
木場君と私は無視しているが、お兄ちゃんはゲッソリしている。
理由は腐った視線のせいだろう。
しばらく歩いていると洋館みたいな建物が見えてきた。
「ここに部長がいるんだよ。」
そう言いながら中に入っていく。
上に看板の様なものがあり、オカルト研究部と書かれていた。
中には、映画に出てくるような魔術の道具やら、魔法陣が書かれて

いた。
さらにソファー、デスクがいくつかあり、ソファーに誰かが座っていた。
ん？あれって確か・・・思い出した。
「ども・・・」
と言いながら手に持った羊羹を食べていた。
確か名前は塔城　子猫さんだったはず・・・。
「こんにちは。」
と私は笑顔であいさつし返した。
そういえば、さっきからシャワーの音がする。
よく見てみると部室の中にシャワーがありタオルの向こうから誰かが浴びているのが見える・・・。
・・・っは！？しまった！お兄ちゃんが凝視している！
とりあえず私は急いで目隠しをした。
向こうから話し声が聞こえる。
片方はあの女だが、もうひとつは確か姫島　朱乃先輩だったかな？
そして二人とも出てくる。
私はお兄ちゃんの目隠しをとる。お兄ちゃんは少し残念そうな顔をして、
「毬～何で目隠ししたんだ？」
と聞いてきたので、
「お兄ちゃんが、いやらしい目つきしてたから。」
そう言うと子猫さんが同意するようにウンウンとうなずいていた。
「あらあら、はじめまして、私、姫城朱乃と申します。どうぞ、以後、お見知りおきを。」
と笑顔であいさつされた。
「さて、もう知っているとは思うけれど私はリアス・グレモリー。この部の部長よ。」
そう言うと、
「これで全員そろったわね。兵藤　毬さん。一誠君。いえ、マリと

イッセーと呼ばせてもらうわ。」
「は、はい。」
「はい。」
まぁ、別にどう呼ぼうとかまいませんが・・・
「私たちは、あなた達を歓迎するわ。」
「え、あ。はい。」
「はい。」
お兄ちゃんは、たどたどしく答えるので精一杯らしい。
そう考えていると、
「悪魔としてね。」

爆弾発言をされた。

イッセーｓｉｄｅ・・・

そのあと、朱乃さんから、お茶をもらい、色々な話を聞いた。
なんでも、堕天使と悪魔は地獄の覇権を争っているとか、堕天使と悪魔を問答無用に襲いかける天使。
しかも女子と付き合っているとか夢が本当だったとか。
しかも、女子と付き合っていた子が堕天使とか、俺たちが殺されそうになったのは神器を持っていたから。
昨日襲われた話を聞いたとき、毬が
「お兄ちゃんを殺そうとするなんて・・・万死に値するねそいつら・・・。」
と、少し危ない発言をしていた。
皆さんが少し驚いてるよ。
「ブツブツ・・・・。」
毬は何かつぶやいている。その中、
「ねぇ、イッセー。マリどうしちゃったの？」
と、聞いてきた。

あ、そう言えば言い忘れてた。
「いえね、毬は昔から俺に何かあるとあんな感じになっちゃうんですよ。」
「そうなの・・・。話を戻してもいいかしら、マリ？」
「ブツブツ・・・え！？あ、はい。すいません。」
次に神器について説明された。なんでも、俺達の中に宿っているという規格外の力らしい。
「で、神器を発動させるためには、その人が一番強いと思う物の姿をイメージするの。イッセーやってみて。」
一番強い姿か・・・やっぱり、
「一番強い存在・・・。ドラグ・ソボールの空孫悟かな・・・・」
「じゃあその姿を真似してみて。」
「え！？今ここでですか？」
「そうよ。」
な、なんてこった・・・。この年になってドラゴン波を撃つ真似しなければならないなんて・・・。
「は、はい。じゃあ・・・。」
俺はドラゴン波の格好をした。
「そのまま一気に力を解放するようにやってみなさい。」
「いきます。ド～ラ～ゴ～ン～波ーーーーーー！！！！」
叫んでやったぜ。
ん・・・？うおっ！？なんだ俺の腕が光ってる！
「それがあなたの神器よ。」
これが・・・。俺の左腕に赤い宝玉の付いた赤い籠手のようなものがあった。
「マリ。あなたもよ。」
えっ！毬にも神器があったのか！？
毬もびっくりしたような顔をしている。
「マリ。イッセーがやったようにやってみて。」
「は、はい。」

そう言いながら、毬は俺と同じような恰好した。
あれ？毬ってドラグ・ソボールきらいじゃなかったっけ？
そう思っていると、
「あら、マリ。イッセーと同じポーズなのね。」
「いえ、少し違います。」
え、何が違うんだ？
「何が違うの？」
部長もそう思ったらしい。
「これはお兄ちゃんが最強と思ったポーズを最強と考えてポーズをとっているので、はっきり言えばお兄ちゃんのまねです。」
「そ、そうなの・・・。」
少々びっくりしてしまった。
だって、俺より強い毬が、俺を最強っていうんだぜ。驚かなくてどうする。
「いきます。ド～ラ～ゴ～ン～波ーーーーーー！！！！」
そう叫んだ瞬間、毬の体が光に包まれた。

マリｓｉｄｅ・・・

うわっ。びっくりした～。
私の体が光に包まれた後、私の両手首、両足首、首に十字架の様なアクセサリーが付いていた。
「これが、私の神器？」
そう言っていると、みんな私から離れていた。
「えっ！？どうしたんですか？」
みんな、すごい険しい顔をしている。
「ねぇ、マリ」
「は、はい。何ですか？リアス部長？」
部長が恐る恐る聞いてきた。
「あなた、体に異変とか無いの？」

「へ？ありませんけど・・・？」
「そうなの？おかしいわね・・・。」
「あのどうかしたんですか？私。」
そんなに真剣になられると逆に怖い。
そう思っていると、朱乃先輩が、
「悪魔にとって、聖なる道具という物は弱点の様なものなのですね。十字架も悪魔には触っただけで激痛を及ぼす代物のはずなのですが・・・。」
つまりは、私は神器とはいえ十字架を触れて激痛を感じないおかしな状態にいると・・・。
「ヤバいんですかね・・・？私。」
少し怖くなってしまった。すると、お兄ちゃんが私の首に付いている十字架のネックレスに触れてきた。
「お、お兄ちゃん！？」
「部長。俺が触っても激痛起りませんし、この十字架が特別なだけなのではないでしょうか？」
お兄ちゃんがそう言うと、
「そうなのかしら？でも、そうなのかもしれないわね。」
とみんな納得してくれた。
「ありがとう。お兄ちゃん？」
ところで、
「そう言えばどうしてリアス部長は私たちが死んでるって気付いたんですか？」
そう聞くと、
「それはコレのおかげよ。」
と、一枚の紙を取り出した。
その紙には、こう書かれてた。
『あなたの願い叶えます！』
そんな謳い文句と奇妙な魔法陣の描かれたチラシだった。
「これ、私たちが配っているチラシなのよ。これは、私たち悪魔を

召喚するためのもの。最近魔方陣を書くまでして悪魔を呼ぶ人はいないにの。こうして、チラシとして、悪魔を召喚しそうな人間に配っているの。あの日私たちの使い魔が繁華街でチラシを配っていたの。それをイッセーが手にした。そして、堕天使攻撃されたイッセーは私を呼んだの。私を呼ぶほど願いが強かったんでしょうね。普段なら眷属の朱乃呼ばれるんだけれど」

そうだったんだ・・・。

「召喚された私はあなたを見てすぐに神器所有者で堕天使に害されたのだと察したわ。イッセーとマリは死ぬ寸前だった。そこで私はあなたの命を救うことにしたの。悪魔としてね。あなたは私の眷属として生まれ変わったわ。」

へぇ～なるほどね。

「じゃあ、ひと段落ついたところで、改めて、紹介するわね。裕斗」

「僕は木場裕斗。イッセー君とマリちゃんと同じ二年生ってことはわかっているよね。僕もあくまでです」

「・・・一年生。・・・・塔城子猫です。・・・悪魔です」

「三年生、姫島朱乃ですわ。今後もよろしくお願いします。これでも悪魔ですわ。うふふ」

「そして、私が彼らの主であり、悪魔であるグレモリー家のリアス・グレモリーよ。家の爵位は公爵。よろしくね、マリ、イッセー」

その言葉に私たちは、

「「はいっ！！」」

と大きな声で返事をした。

4．悪魔達の喧騒（後書き）

毬「私の神器おかしいじゃない！作者どうしてくれるのよ！」
君「おいおい、それは間違っている。」
毬「それはどう意味よ！」
君「それはまたいつか。次回『悪魔とシスター』悪と聖が交わるとき物語は始ま　　る。」
毬「パクってんじゃないわよ！！！」
君「へぶっ」

5．悪魔とシスター（前書き）

gd gdです。

いやー酷い！！

さらにへたくそになった気がします。

5．悪魔とシスター

マリside・・・

「さて、紹介も終えたし次は悪魔について詳しく話そうかしら。」
リアス部長は、そう言うと私たちを見て、
「まず、悪魔の中ではあなた達は転生悪魔の部類に入るの。たいていは下僕としてひどい扱いを受けてしまうわ。私はそのような扱いにはしないけどね。」
「なぜですか？」
そう聞くと、部長の代わりに木場君が答えてくれた。
「それはね、部長の家のグレモリー家は悪魔の中では少ない眷属を大切にする悪魔なんだ。だから、僕たちはこの人に会えてよかったと言えるよ。」
「へぇ～そうなんですか・・・。」
じゃあ私たちはラッキーなんだ。
少しうれしいな♪
少し浮かれていると
「でもね、悪魔には階級があるの。爵位っていうのがね。私も持っているわ。これは生まれや育ちにも関係するけど、成り上がりの悪魔だっているわ。最初は皆、素人だったわ」
あ、やっぱりそうなんだ。みんな1からのスタートなんだね。
お兄ちゃんは不服そうにしていると、
「やり方しだいでは、モテモテな人生も送れるかもしれないわよ？」
と、リアス部長が爆弾発言をした。
もちろんお兄ちゃんは、
「どうやってですか！？」
即座に反応した。あまりの反応の速さに、反射の域にいっているね。
皆、お兄ちゃんの反応の速さに少し驚いていた。

リアス部長は、
「純粋な悪魔は昔の戦争で多くが亡くなってしまったのよ。そのため、悪魔は必然的に下僕をあつめるようになったの。まあ、以前のような軍勢を率いるほどの力も威厳も消失してしまったけれど。それでも新しい悪魔を増やさないといけなくなった。悪魔にも人間同様に性別はあるから悪魔の男女の間に子供は生まれるわ。それでも自然出産で元の数に戻るには相当な時間がかかってしまうの。悪魔という存在は極端に出産率が低いから。それでは堕天使に対応できない。そこで素質のありそうな人間を悪魔に引き込むことにしたわけ。下僕としてね」
と続けた。
あれ？結局下僕じゃないですか。
お兄ちゃんもそう思ったらしい。
「もう、そんな残念な顔をしないで。話はここから。ただそれでは下僕を増やすだけで力のありそうな悪魔を再び存在させることにはならない。だから、悪魔は新しい制度を取り入れたわ。力のある転生者――つまり、人間から悪魔になった者にもチャンスを与えるようになったのよ。力さえあれば、転生者でも爵位を授けよう――と。そのせいもあって、世間に割と悪魔は多いわ。私たちみたいに人間社会に潜り込んで行動している悪魔も少なくないしね。イッセーやマリも知らず知らずのうちに悪魔と町中ですれ違っていたと思うわ」
え！？そうだったの！？私も気づかず悪魔とすれ違っていたりしたんだ。
少し怖い・・・。
「ええ。もっとも、認知できる者とできる者がいるわ。欲望が強い者や悪魔の手でも借りたいほど困っている人間は悪魔に強く認識しやすいわね。そういう人たちに魔法陣つきのチラシを配ると私たちは召喚されやすいのよ。悪魔を認知できても、先ほどのイッセーのように私たちの存在を信じない者も多いけど、魔力を見せれば大抵は信じるわ」

そうかもね～。私はすぐ信じたけど。

「じゃ、じゃあ！やり方次第では俺も爵位を！？」

「ええ。不可能じゃないわ。もちろん、それ相応の努力と年月がかかるでしょうけど」

「うおおッッ！！」

うわっ！いきなり叫んでびっくりするじゃん。

「どうしたのお兄ちゃん？」

でもお兄ちゃんは、聞こえてないらしく、

「マジか！俺が！俺がハーレムを作れる！？エ、エッチなことしてもいいんですよね！？」

お兄ちゃん・・・。そこまでだと、流石にひくよ。私でも。

「そうね。あなたの下僕ならいいんじゃないかしら」

あ！リアス部長！火に油を注がないで下さいよ！

お兄ちゃんが止まりそうもなくなってきた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッ！！悪魔、最高じゃねぇか！何、これ！何、これ！チョーテンション上がってきたよ！いまなら秘蔵のエロ本も捨てられ――」

「え！本当！じゃあ早く家に帰って、捨て「いや、エロ本はダメだ。アレはダメだ。俺の宝だ。お袋に見つけられるまではやっていける！それとこれは別だ。うん、別だ！だから捨てない！前言撤回！」

えぇー。」

せっかく、あのHな本を捨てたりできると思って喜んだのに。

そう思っていると、

「フフ。おもしろいわ、この子」

「そうですか？」

うーん。面白いかな？

まぁ、これもお兄ちゃんの魅力の一つだけどね。

「あらあら。部長が先ほどおっしゃっておられた通りですわね。『おバカな弟としっかり者の妹ができたかも』だなんて。」

そういう風にリアス部長の目には映ってたのかぁ。
まぁ、否定はしないけど。
「いや、否定しろよ！」
「うわっ！いきなり私の思考を読まないでよ！お兄ちゃんとはいえプライバシーの侵害だよ！」
「う・・・すまん・・・。」
「よし許す！」
あ～楽し♪
「というわけで、イッセー、マリ。私の下僕というわけでいいわね？大丈夫、実力があるならいずれ頭角を表すわ。そして、爵位をめらえるかもしれない」
「「はい、リアス先輩！」」
「違うわ。私のことは『部長』とよぶこと」
「部長ですか？『お姉さま』じゃダメですか？」
「お兄ちゃん・・・はぁ。」
「何でため息つくんだよ毬？」
「別に～。」
お兄ちゃん。そんなに部長のことが好きなのかな・・・。
「うーん。それも素敵だけれど、私はこの学校を中心に活動しているから、やはり部長のほうがしっくりくるわ。いちおう、オカルト研究部だから。その呼び名でみんなも呼んでくれてるいるしね」
「わかりました！では、部長！俺に『悪魔』を教えてください！」
お兄ちゃん・・・。動機が不純すぎ。
「フフフ、いい返事ね。いい子よ、イッセー。いいわ、私があなたを男にしてあげるわ」
といってお兄ちゃんのあごをなでるリアス部長。
「部長！お兄ちゃんの貞操は妹の私を通してからにしてください！」
さすがにそこは譲れない！譲っちゃいけない！！
そう叫んでリアス部長と、お兄ちゃんを離した。
お兄ちゃんは、

「ハーレム王に俺はなるっ！」
と叫んだ。
「はぁ・・・。」
これからは苦労が多そう・・・。

イッセーside・・・

その後、部長から悪魔の基本的な事を教わった。
まず、集まりは旧校舎のオカルト研究部の部室。時刻は深夜。
なんで夜中かというとそっちの方が悪魔の力が発揮されるからだそうだ。
悪魔だから闇の世界になると力が増すらしい。
だから、夜になると色々と強くなった感覚があったのか。
あと、朝がさらに弱くなった理由も悪魔になったからだそうだ。
悪魔は光を嫌う。光が強いと体に悪いらしい。
俺と毬が朝が弱くなった理由も悪魔に転生したてだから日の光に慣れていなかったからしい。
ついで、俺も毬も悪魔になって日が浅いから、まず悪魔社会の仕組みについて勉強しないといけないらしい。
あ、あとは学園についてだ。
俺の通ってる駒王学園は部長の領土になってるらしい。
学園の偉い人たちも悪魔関係者でグレモリー家に頭があがらない。
つまり学園は部長の私物みたいな感じだ。
そのおかげで夜中に学園に集まれるんだな。
そして話はチラシ配りになるんだが、魔法陣がかかれたチラシを謎の機械で点滅してるお宅に届ける。
この謎の機械なんだが、悪魔の科学が生んだ秘密道具らしい。毬が某ネコ型ロボットのように音を口ずさんでいた。
携帯ゲーム機似でそれプラスタッチパネル式だ。
なんか、悪魔ごとに人間界で活動できる範囲は決まってるらしくて、

その範囲内でしか仕事。
つまり、人間との契約で相手の願いを叶えることだ。
代償としてお金や物、最悪命をもらうらしい。命をもらうの部分で
毬は震えていた。
毬は怖いもの苦手だからな～。
で、この謎の機械に点滅してるところが欲が強い人間がいる家なん
だ。
それから悪魔の活動時間はよるだけらしい。なんでも昼は神やら天
使やらの時間なんだというこだ。
チラシは使い捨てらしいから、味をしめた人間が悪魔に願いを叶え
たくなったらまたポストに入れに行かないといけない。
だから今、俺と毬は自電車で走り回っている。
つらいが、これもハーレムのため！
「うおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉ！！！！！」

ある日の放課後

「「失礼しま～す」」
俺たちはいつも通り、部室へ入って行った。
「来たわね」
部長が俺たちを見たとたん、朱乃さんに指示をしていた。
何だろうか？
「はい、部長。じゃあまずはイッセーくん、魔法陣の中央へきてく
ださい」
「え？あ、はい。」
俺は、恐る恐る魔法陣の中に進む。
「イッセー、マリ。あなた達のチラシ配りはもう終わり。よくがん
ばったわね」
笑顔でいってくる部長。おお！やっと終わったのか！毬もうれしそ

うにしている。
「改めて、あなた達にも悪魔としての仕事を本格的に始動してもらうわ。」
「おおっ！俺達も契約取りですか！」
「ええ、そうよ。もちろん、初めてだから、レベルの低い契約内容からだけれど。小猫に予約契約が二件入ってしまったの。丁度いいからマリとイッセーにいってもらうわ。」
やった！ついに・・・ついに！俺の願望がかなう時だ！
俺の足元の魔法陣が光り始めた。
「あ、あの・・・」
「黙っていて、イッセー。朱乃は、いまあなたの刻印を魔法陣に読み込ませているところなの」
そうなんですか・・・。何かパソコンみたいだな。
そういえば、部長が眷属悪魔にとってこの魔法陣は家紋のようなものだって言ってたな。
つまり、召喚するもの、契約を結びたいものにとって、これが俺たちを表す記号になる。
魔力とやらの発動もこの魔法陣を絡めたものになるんだと。
木場たちの体にはこの魔法陣が大小各所に書き込まれていて、魔力の発動と一緒に機能するそうだ。
俺や毬はそれよりも先に魔力コントロールから始めないといけないらしい。
「イッセー、手のひらをこちらに出してちょうだい」
部長の指示どおりに俺は左手を部長に向ける。
すると部長が俺の手のひらをなぞる。なぞり終えたら、俺の手が光り出した。
よく見てみると魔法陣のようだ。なるほど、いまのは魔法陣を書いてたのか。
「これは転移用の魔法陣を通って依頼者のもとへ瞬間移動するためのものよ。そして、契約が終わるとこの部屋に戻してくれるわ」

へぇー、便利だなぁー。これさえあればいろんな所へ行けるわけだ。
魔法陣があればの話だけど・・・。
「朱乃、準備いい？」
「はい、部長」
そういって朱乃さんが魔法陣の中央から離れていく。
「さあイッセー、中央にたって」
部長にそう促され、俺は中央に立つ。瞬間また強く光り出す魔法陣。
「魔法陣が依頼者に反応しているわ。これからその場所に飛ぶの。
到着後のマニュアルは大丈夫よね？」
「はい！」
「いい返事ね。じゃあ、行ってきなさい！」
そして俺の体の周りが輝きだした。

マリｓｉｄｅ・・・

うわ！お兄ちゃんの体が光ってる！
まぶして見えない。私が腕で目を隠していると光が弱まってきた。
私は魔法陣の方向を見てみる。
・・・え？・・・お兄ちゃん何でいるの？
周りをみると、リアス部長は額に手をあて、困り顔を浮かべ、朱乃先輩は「あらあら」と残念そうな顔をし、木場君はため息をついていた。
「・・・イッセー」
部長が目を点にしているお兄ちゃんを呼ぶ。
「はい」
お兄ちゃんは何が何だか分からないって顔をしていた。
「残念だけど、あなた、魔法陣を介して依頼者のもとへジャンプできないみたいなの」
え！そんな、なんで！？
「魔法陣は一定の魔力が必要なやけだけど・・・。これはそんなに

高い魔力を有するものではないわ。いいえ、むしろ悪魔なら誰でもできるはず。子供でもね。魔法陣ジャンプなんて初歩の初歩だもの」
えーと、その話から考えるとつまり、
「つまり、イッセー、あなたの魔力が子供以下。いえ、低レベルすぎて、魔法陣が反応しないのよ。イッセーの魔力があまりにも低すぎるの」
な、なんだってーー！
つまりお兄ちゃんは役立たずということになるよね？
「な、なんじゃそりゃぁぁぁぁ！？」
お兄ちゃん・・・。私はかわいそすぎて泣きたくなった。
だって、あんなに出世したがってたのに、役立たず認定って・・・。
「・・・無様」
ぼそりと無表情で呟く子猫ちゃん。
やめてあげて！かわいそうだから。
すると朱乃先輩が困り顔で部長さんに尋ねる。
「あらあら。困りましたわねぇ。どうします、部長」
「イッセー」
「は、はい」
「依頼者がいる以上、待たせるわけにはいかないわ。イッセー！」
「はい！」
「前代未聞だけれど、足で直接現場へいってちょうだい」
「あ、足！？」
あ、その手があったか！
「えぇ、チラシ配りと同様に移動して、依頼者宅へ赴くのよ。仕方ないわ。魔力がないんだもの。足りないものはほかの部分で補いなさい」
「チャリですか！？チャリでお宅訪問！？そんな悪魔存在するんですか！？」
ビシッ。

無言で子猫ちゃんが指を指す。
「ほら、いきなさい！契約を取るのが悪魔のお仕事！人間を待たせてはダメよ！」
そう言われてお兄ちゃんは出て行った。
えーと・・・。
私は？
「あなたは魔法陣で行ってもらうわ。」
「え！お兄ちゃんは！？」
「後から来るから大丈夫よ。じゃあ魔法陣の中央に向かって。」
できたら、お兄ちゃんと一緒に行きたかったなぁ。
リアス部長から魔法陣をもらって、
「マリ。がんばってね。」
「はい！」
そう言って、私は光に包まれた。
ん・・・。
あれ？知らない家だ。やった。
「転送できたーーー！！」
「うわっ！」
あ、いけない大声出しちゃった・・。
「えーと、グレモリーの使いの者です。あともう一人後から来ますが、先に用件だけ聞きたいんですが？」
「え！あ、あぁ。えーと確か子猫ちゃんで要望したんだけど？」
「あ、すいません。子猫ちゃんに二つ依頼があってそれで片方に代わりとして私が派遣されました。」
「あ、そうなの。じゃあ、金持ちに出来る？」
「あ、少し待ってください。えーと、それだと対価が命になってしまうんですが、よろしいですか？」
私は最上級の笑顔でそう言った。
「いやいやよくないよ！じゃあ、ハーレムは？」

「えーと、あ、それでも同じですね。」
私は最上級の（ｒｙ
「まじかよ・・。じゃ、じゃあさ君の体は？」
「あぁ、すいません。そう言うのにはそれ担当の悪魔がいますのでそちらに。ついでに言うとそういうこと言うと、魂ごと滅ぼしますよ？」
私は怒気を含めた笑顔で言った。
「ひ、ひぃ」
あら、すごい怯えてる。
（ピンポーン）
「あ、連れがきたみたいですね。中に入れさせていただきます。」

イッセーｓｉｄｅ・・・

やっと着いた・・・。
さて中に入るか。
（ピンポーン）
「すいませ～ん。リアス・グレモ「お兄ちゃん御苦労さま。さ、早く早く！」ま、毬！何でいるんだ！？」
「ん？先に転送してきてたんだ。」
なん・・・だと・・・。
「妹に負けた・・・。」
そのあと色々とあったが割愛させていただこう。

後日～

「はぁ。」
「お兄ちゃん。過ぎたるは及ばざるがごとしだよ！」
親指を立てて笑顔で言ってきた。
「だってよ～契約取れなかったんだぜ。部長には迷惑かけちまった

し・・。」
「で、でもさ、一応ほめてくれたじゃん。それで良しとしようよ！ね。」
「そうだな。次がんばるか。」
「うんうん。その意気だよ。」
「心配させて悪かったな。」
そう言って、俺は毬の頭をなでてやった。
「うにゅ～。」
毬は目を細めて喜んでいる。
（猫みたいだな）
そうやってなでていると、
「ん？あの子・・。」
毬が何か言っているので見てみると、
（ここで、劇的ビフォーアフターのテーマ曲を脳内再生してください）
何ということでしょう。そこには、金髪の超美少女がいるではありませんか。
シスター服を着て、少し子供っぽさを残した顔。
そんな子が困っていたらどうします？やることは一つ！
俺は女の子の近くに行き膝をついて、
「何かお困りですか？」
あくまで、紳士的に聞いてみた。
「え、あの～。近頃こちらに来て、目的地に行こうとしたんですが、そしたら道に迷ってしまって・・・。」
毬が女の子の持っている髪を見て、
「何だ近くじゃない。ねぇ、お兄ちゃん。案内してあげない？」
そう言ったので、
「そうだな」
と、俺は同意した。女の子は、
「い、いえっ！そんなご迷惑をかけられません。」

と遠慮してきた。
「いいのいいの。旅は道ずれ世は情けってね。ね、お兄ちゃん。」
「あぁ、そうだぞ。遠慮しなくていい。」
そう言うと、
「ありがとうございます。あ、私アーシア・アルジェントと言います。」
「あ、俺、兵藤　一誠。んでこいつは「妹の毬です。」よろしくな。」
「はい。よろしくお願いします。」
そう言って俺たちは歩きだした。
しばらくすると、少年が泣いていた。
どうやら、膝をすりむいたらしい。
アーシアは、近づくと、
「大丈夫ですよ。」
と言いながら傷に手をかざした。
すると、淡い緑色の光が発生した。
あれは・・・、
「神器だよね。お兄ちゃん。」
「あぁ。」
どうやら毬も同じことを思っていたらしい。
少年は親に連れていかれた。
そのあと、アーシアの過去について聞いた。
・・・なんだよそれ・・・
「酷いねそれ・・・。」
毬とは考えがよく合う。
やはり、兄妹だからか？
そう思っていると、教会に近づいてきた。
「うっ・・・」
なんか、すごい悪寒を感じた。
毬は、怖いのかブルブル震えている。

「大丈夫か毬？（小声で）」
「うん・・・。」
そうとは気付かず、アーシアは、
「ありがとうございました。イッセーさん達に会えたのも、髪のお導きのおかげでしょう！おぉ！神よ！」
ぐわっ！アーシアがお祈りしたため、激痛が走る！
いってー！！！！
毬も頭を抱えている。ここは兄である俺が何とかしなければ！
「アーシア。大丈夫だから早く行きなよ。（俺たちのために！）」
「え？あ、はい！本当にありがとうございました！」
そう言ってアーシアは教会へと、走って行った。
俺らは急いでそこから離れた。
あー。死ぬかと思った・・・。

5．悪魔とシスター（後書き）

毬「怖かったよ～お兄ちゃん～。」
一「ハイハイ。怖かったな。」
君「さて次はいよいよ、バトル！」
毬「え？そうなの？」
一「聞いてねぇよ！」
君「毬の駒もわかります。次回『闇に潜みし影は・・・』お楽しみに！」
毬「気になる・・・。」
一「同感。」

6．闇に潜みし影は・・・（前書き）

かなり遅れました。

アドバイスをもらい出来る限り読みやすいように調節させてもらいます。

問題があったら言ってください。誤字が多いかもしれません・・・。

6．闇に潜みし影は・・・

マリside・・・

「二度と教会に近づいちゃダメよ」

私やお兄ちゃんが本格的に悪魔稼業を開始して数日がたったある日の夜。とてつもなくご立腹な様子のリアス部長がお兄ちゃんに言い放つ。

「教会は私たち悪魔にとって敵地。踏み込めばそれだけで神側と悪魔側の間で問題になるわ。
今回はあちらもシスターを送ってあげたあなたの厚意を素直に受け止めてくれたみたいだけれど、天使たちはいつも監視しているわ。
いつ、光の槍がとんでくるかわからなかったのよ？」

え！？そうだったの？そう思うと・・・ブルッ・・・
五体満足でよかった～（汗）
お兄ちゃんもそう思っているのか、足が少し震えているし・・・。
にしても、リアス部長の怒り方が半端ない。
そんなに危険だったんだ・・・。

「教会の関係者にも関わってはダメよ。特に『悪魔払い』は我々の仇敵。
神の祝福をうけた彼らの力は私たちを滅ぼせるほどよ。神器所有者が悪魔払いなら尚更。
もう、それは死と隣り合わせるのと同義だわ。イッセー」

「は、はい」

すごい眼力・・・

「人間としての死は悪魔への転生で免れるかもしれない。
けれど、悪魔払いを受けた悪魔は完全に消滅する。無に帰すの。
―――無。何もなく、何も感じず、何も出来ない。それがどれだけのことかあなたはわかる？」

無って、想像できないな。
想像できたら無じゃないし（笑）

「ゴメンなさい。熱くなりすぎたわね。とにかく、今後は二人とも気をつけてちょうだい。」

「は、はい！」
「了解です！」

もう出来たら二度と近づきたくないな。
もちろん、お兄ちゃんが教会に何かされたら、絶対ぶっ潰して消滅させてやるけどね♪

「あらあら。お説教はすみましたか？」

「おわっ」
「キャッ」

いつの間にか朱乃先輩が後ろにいた。
びっくりした・・・。

「朱乃、どうかしたの？」

というリアス部長の問いかけに少し顔を曇らながら朱乃先輩が言う。

「討伐の依頼が大公から届きました」

――――はぐれ悪魔。

そういった存在があるらしい。
爵位持ちの悪魔に下僕にしてもらった者が、主を裏切り、または主を殺して主なしとなる事件が極稀にあるらしい。

それで、そういった野良犬？による被害を最小限に抑えるために、見つけだして、主人、もしくは他の悪魔が消滅させるのがルールだということらしい。

これは、天使や堕天使側でも言われてることらしくてはぐれ悪魔がいたらみつけしだい殺すということらしい。

お兄ちゃんはそういう物に間違えられて殺されかけたらしい。
うん。ハタ迷惑極まりないね。この世から消し去ってやらなくちゃ☆

というわけで、私たちオカルト研究部一同。
町外れの廃屋近くにきてまーす！！テンション高いって？
だって、怖いからテンション上げなくちゃ怖くて泣いちゃいそうなの！

なんでも、ここで毎晩はぐれ悪魔が人間をおびき寄せて食ってるらしい。
怖い・・・・・・・・。

『リアス・グレモリーの活動領域内に逃げ込んだため、始末してほしい』

って、いうのが偉い人から届いたものだから、こうしてクエストを受託して目的地へ向かっているんです。

時刻は深夜。辺りには背の高い草木が生い茂っていて、そのさきに廃屋が見える。

見えないのも恐怖だけど、見えても恐怖って・・・。

「・・・血の臭いがしますね」

木場君がそう言った。

え！？そんな怖いこと言わないでよ！

「・・・はい」

隣にいた子猫ちゃんは制服の袖で鼻を覆っている。

「イッセー、マリ。２人にはちょうどいい機会だから悪魔としての戦いを経験しなさい」

そのリアス部長の一言に少し驚く。

そんな！こんな怖いとこで戦えって・・・。

無理無理！！絶対無理！！！

「大丈夫。流石に戦わせないわ。でも、悪魔の戦闘を見ることはできるわよね？

今日、２人は私たちの戦闘をよく見ておきなさい。そうね、ついでに下僕の特性を説明してあげるわ」

「下僕の特性？説明？」

怪訝そうな表情を浮かべながらお兄ちゃんがリアス部長を見る。
よくわからない。どういう意味？

「主となる悪魔は、下僕となる存在に特性を授けるの。
・・・そうね、頃合だし、悪魔の歴史を含めてその辺を教えてあげるわ」

そういって私とお兄ちゃんに現在の悪魔の状況を説明し始めた。

「大昔、我々悪魔と堕天使、そして天使を率いる神は三つ巴の大きな戦争をしたの。
大軍勢を率いて、どの勢力も永久とも思える期間、争い合ったわ。
その結果、どの勢力も酷く疲弊し、勝利する者もいないまま、戦争は数百年前に終結したの」

リアス部長の言葉に木場君が続ける。

「悪魔側も大きな打撃を受けてしまった。
二十、三十もの軍団を率いていた爵位を持った大悪魔の方々も部下の大半を長い戦争で失ってしまったんだ。もはや、軍団を保ていないほどにね」

次に朱乃先輩が口を開ける。

「純粋な悪魔はそのときに多く亡くなったと聞きます。
しかし、戦争は終わっても、堕天使、神との睨み合いは現在でも続いています。

いくら、堕天使側も神側も部下の大半を失ったとはいえ、少しでも隙を見せれば危うくなります」

「そこで悪魔は少数精鋭の制度を取ることにしたの。それが『悪魔（イーヴィル・ピース）の駒』」

リアス部長の話で気になる単語が出る。

「イーヴィル・ピース？何ですかそれ？」

お兄ちゃんも疑問に思ったらしく、首をかしげている。

「爵位を持った悪魔は人間界のボードゲーム『チェス』の特性を下僕悪魔に取り入れたの。下僕となる悪魔の多くが人間からの転生者だからって皮肉を込めてね。

それ以前から悪魔の世界でもチェスは流行っていたわけだれど。それは置いておくとして。

主となる悪魔が『王』。私たちの間で言うなら私のことね。

そして、そこから『女王』、『騎士』、『戦車』、『僧侶』、『兵士』と五つの特性を作り出したわ。

軍団を持てなくなった代わりに少数の下僕に強大な力を分け与えることにしたのよ。

この制度をできたのはここ数百年のことなのだけれど、これが意外にも爵位持ちの悪魔に好評なのよね」

「好評？チェスのルールで？」

「競うようになったのよ。

『私の騎士は強いわ！』、『いえ、私の戦車のほうが使える！』っ

て。
その結果、チェスのように実際のゲームを、下僕を使って上級悪魔同士で行うようになったのよ。
駒を生きて動く大掛かりなチェスね。私たちは『レーティングゲーム』と呼んでいるけれど。
どちらにしても、このゲームが悪魔の間では大流行。今では大会も行われているぐらいだわ。
駒の強さ、ゲームの強さが悪魔の地位、爵位に影響するほどにね。
『駒集め』と称して、優秀な人間を自分の手駒にするのも最近流行っているわ。
優秀な下僕はステータスになるから」

つまり、偉い人の娯楽のために人生狂わされる奴が出てきちゃうってことなんだ。
そんなに自分の栄誉や評価が大切かな？

「そのゲームにはもう部長たちは出たりしてるんですか？」

とお兄ちゃんがリアス部長に向けて質問をぶつける。

「私はまだ成熟した悪魔ではないから、公式な大会などには出場できない。
ゲームをするとしても色々な条件をクリアしないとプレイできないわ。
つまり、とうぶんはイッセーやマリ、ここにいる私の下僕がゲームをすることはないってことね」

「じゃあ、木場君たちもそのゲームをしたことはないってこと？」

「うん」

「部長、俺の駒は、役割や特性って何ですか？」

・・・そういや、特性やら役割やらなんか言ってたね。

私も気になってた。

そう思っているといきなり何かたとえようのない寒気が体中に走った。

振り向くと、何かがいた。私には何かとしかわからなかった。

「不味そうな臭いがするぞ？でも美味そうな臭いもするぞ？甘いのかな？苦いのかな？」

・・・なんか嫌な声色だ。長い間聞いていたくない感じの。

「はぐれ悪魔バイザー。あなたを消滅しにきたわ」

リアス部長が声を高らかに言い放つ。すると――――、

「ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタ・・・・・・。」

とても人間がだすような声じゃないモノが聞こえてくる。

嫌だ・・・。ここにいるのが嫌になってくる。

人なら大丈夫なのに。人の形してればまだ対応が出来るはず・・・。

暗がりから姿をゆっくりと何かが現れる。

・・・上半身裸の女性だ。少し、目を凝らしてみる。するとそこには下半身が獣の体をしていた。

上が女で下がバケモノ・・・。

うん。無理。
私はお兄ちゃんにしがみつく。
お兄ちゃんは私がこういうのが苦手なのを知ってるから頭をなでてくれた。
（あ～落ち着く。）

落ち着いたところでさらに細かくみてみると、両手には獲物としての槍が一本ずつ。
下半身は四本足があり、すべて太く、爪も鋭い。尾には蛇が見える。
大きさも五メートルは軽くある。
うん、正真正銘の『見た目バケモノ』。何で人の格好しないのかな・・・。
私が戦えないじゃない！！

「主のもとを逃げ、己の欲求を満たすためだけに暴れまわるのは万死に値するわ。
グレモリー公爵の名において、あなたを消し飛ばしてあげるわ！」

「こざかしぃぃぃ！小娘ごときがぁぁ！その紅の髪のように、おまえの身を鮮血で染め上げてやるわぁぁぁぁぁ！」

死亡フラグ見事に建てましたね。

「雑魚ほど洒落のきいたセリフを吐くものね。裕斗！」

「はい！」

リアス部長の呼びかけで木場君が飛び出す。
うわー、速いなぁ。

「イッセー、マリ。さっきの話の続きをするわ」
話？
特性がどうってやつ？
「裕斗の役割は『騎士』、特性はスピード。『騎士』となったものは速度が増すの」
リアス部長の言うとおり、木場君の動きは徐々に速くなる。
すごく速い。人外の方は・・・。ただ振り回してるだけだね。
あれじゃ、あたるものも、あたらないよね。
「そして、裕斗の最大の武器は剣」
そして、足を止めた木場君の手には鞘に収まった西洋剣が握られていた。
あれ？剣なんて持ってた？
木場君はそのまま剣を鞘から抜く。そして、再び走り出す。
そして敵が認識するよりも速く、両腕を切り落とした。
「ギャァァァァアアアっ！！」
人外の悲鳴が木霊し、両腕から鮮血が飛び散る。
「これが裕斗の力。目では捉えきれない速力と、達人級の剣さばき。ふたつが合わさることで、あの子は最速のナイトとなれるのよ」
確かに、すごいと思う。
悲鳴を上げる人外の足下にはいつの間にか、子猫ちゃんが立っている。

「次は小猫。あの子は『戦車』。戦車の特性は――――――」

「小虫めぇぇぇぇぇっっ！！」

その言葉と同時に、人外はチビスケを踏み潰しにかかる。

「危ないっ！！」

私はつぶされると思って目を手で覆った。

でも、つぶれる音がしない。

恐る恐る見てみると、人外の足は地面につくことはなく、子猫ちゃんに全衝撃を受け止められた。

え？うそ！？子猫ちゃんが受け止めてる！

「『戦車』の特性はシンプル。バカげた力。屈強なまでの防御力。無駄よ。あんな悪魔の踏みつけたぐらいでは小猫は沈まない。潰せないわ」

だからあんなにすごいんだ！

グンッ！！

完全に人外の足を持ち上げてどかす子猫ちゃん。

「・・・・ふっ飛べ」

子猫ちゃんは空高くジャンプし、人外の腹に拳を撃ち込む。

拳の威力に人外の体が後方に吹き飛ぶ。

すごいパンチ・・・。

お兄ちゃんは子猫ちゃんのパンチラを拝もうと凝視している。
はぁ・・・。お兄ちゃんは・・・。
私はお兄ちゃんの足を踏んでやった。・・・こっちに顔を向けるくらいの強さで。

「最後に朱乃ね」

「はい、部長。あらあら、どうしようかしら」

朱乃先輩が笑みを浮かべながら、さっきの一撃で倒れこんでいる人外のもとへ歩みだす。

「朱乃は『女王』。私の次に強い最強の者。
『兵士』、『騎手』、『僧侶』、『戦車』、すべての力を兼ね備えた無敵の副部長よ」

「ぐぅぅぅぅ・・・・」

近づいてきた朱乃先輩を睨みつける人外。それをみてまた笑みを浮かべる。

「あらあら。まだ元気みたいですね？それなら、これはどうでしょうか？」

そういって朱乃先輩が天に向かって手をかざす。すると――――

カッ！

文字通り、天からの一撃。人外に雷が落ちた。

「ガガガガッガガガガッガガガガッッ！」
それを受けて苦悩な声をだす人外。
びっくりした～。
「あらあら。まだ元気そうね？まだまたいけそうですわね」
カッ！
再び雷がうち下ろされる。
あ、あの～。そろそろいいのでは・・・？
「ギャァァァァァッッ！」
それを受け、また声をあげる人外。
これで終わったかと思ったら、三発目が落下する。
「グァァァアアアアッ！」
え、もう許してあげようよ・・・。
「朱乃は魔力を使った攻撃が得意なの。
雷や氷、炎などの自然現象を魔力で起こす力ね。そして何よりも彼女は究極のSよ」
・・・少し怖さが強まった。・・・別の意味で。
「普段、あんなにやさしいけれど、一旦戦闘となれば相手が敗北を認めても自分の興奮が収まるまで決して手を止めないわ」

・・・怖い・・・。
私はお兄ちゃんにくっついて震えていた。
「・・・うぅ、朱乃さん。俺、怖いっス」
お兄ちゃんも怖いらしい・・・。
「怯える必要はないわ、イッセー、マリ。朱乃は味方にはとてもやさしい人だから、問題ないわ。
あなた達のこともとてもかわいいと言っていたわ。今度甘えておあげなさい。
きっとやさしく抱きしめてくれるわよ」
「うふふふふふ。どこまで私の雷に耐えられるかしらね？
ねぇ、バケモノさん。まだ死んではダメよ？トドメは私の主なのですから。オホホホホッ！」
それから数分間、朱乃先輩のＳＭショーが続いた。
朱乃先輩が一息ついたのを確認したらリアス部長が完全に戦意がなくなった人外のもとへ歩き出す。
そして、地面に突っ伏す人外に向かって、リアス部長は手をかざす。
「最後に言い残すことはあるかしら？」
慈悲深い・・・。
「殺せ」
人外の小さく声を発する。

「そう、なら消し飛びなさい」

すると、リアス部長の低い、冷たい声音とともにどす黒い魔力の塊が手のひらから撃ち出される。

塊は人外の全身を包み込み。そして、魔力が宙に消えたとき、人外の姿も完全に無かった。

文字通り、塵も残らなかった。

「終わりね。みんな、ご苦労さま」

少し人外に同情した。だって、レクチャーのためだけにあれだけなぶられたのだから・・・。

しかし、これが悪魔の戦い・・・。少し怖いけどその分やる気がわいてきた！

でも、なんか忘れてる気がする・・・。あ、そうだ。

「リアス部長、聞きそびれたんですけど」

「何かしら？」

「私やお兄ちゃんの駒・・・、下僕としての役割はなんなんですか？」

「あ、そうだったそうだった。部長、どうなんですか？」

思い出したようにお兄ちゃんも聞いてくる。

リアス部長ははっきりと言った。

「マリ、イッセー。あなた達は『兵士』よ」

私たちは、どうやら一番下らしい。

とりあえず頑張らなくちゃね！

6．闇に潜みし影は・・・（後書き）

毬「お兄ちゃん！同じ駒だし、頑張ろうね。」
一「おう！そうだな！」
君「喜んでもらえて何より。さて次回『はぐれは何を見て笑う』」
毬＆一「「おたのしみに！」」

7．はぐれは何を見て笑う（前書き）

いや～フリードが描きにくい！

かなり疲れました。

感想お願いします。

7．はぐれは何を見て笑う

イッセーside・・・

はぐれ悪魔から一夜明け、自分の駒が『兵士（ポーン）』だと分かり、落胆がデカかった。
上級悪魔になるには道が遠いな・・・。
でも、あきらめない！あきらめないぞ！！

「よっしゃー！　やってやるぜーーー！！」

夜中遅くに叫んで、気合を入れた俺は呼んでくれた人の場所へ走る。
呼ばれた場所は、一軒家だった。
ブザーを鳴らす前に鍵が開いてることに気がついた俺は中に入った。
そして、俺は感じた。

「（なんだ、これ？　凄い嫌な感じだ・・）」

特別、殺気がわかるというわけでも無いのに・・・。
ゆっくりと進んでいく俺は家の中を見てみると、そこは普通と変わらない、一軒家だった。
そのまま、依頼人を探していると、

「な、なんだよ・・・、これ・・・」

そこには男が、太い釘のようなもので手足を壁に打ちつけられ、腹を切り裂かれ内臓を放出していた。

「う！・・・おええええ！」

酷い、酷過ぎる！どうやったら、ここまでこんなことが出来る？
そのように考えていたその瞬間。
後ろから寒気の様な例えようのない衝動に駆られ、俺はその場から急いで離れた

「うおっ！？」

ついさっき俺の体があった場所に何かが通り過ぎる。

「あらら？　避けれちった？」

声がした方向に振り向くとよくわからない恰好をした男がいた。

「誰だ、お前？」

俺はとりあえず自分の持っている疑問をぶつけた。男は呆れたように

「この格好見りゃ、分かるでしょ？　バーカ！」

と言い放った。
・・・まぁ、予想通りの答えだけど。俺は自分の持っている答えを言った。

「・・神父だろ？」

「そういうお前は悪魔だよな？　取り敢えず、悪魔は俺の悦楽の為に死んでくれよ！　ギャハハハハ！！」

っ！！まじかよ！クソッ！！

ダッ！！

俺は部長の言いつけを守ることにし、とっさに逃げ出した。

『神父、もしくは堕天使を見たら、逃げなさい』

部長の言うとおりだった。
コイツはヤバい。なんとも言えぬ恐怖感が体中を駆け巡った。
玄関の方は神父がいるから通れない。だったら・・・窓から！
そう思って窓へ向かおうとすると太ももあたりに激痛が走った。

「ぐあああ！！」

撃たれた？撃たれたのか！？
銃声音はしなかったのに。

「撃たれたって分からなかったみたいだねぇ？
そりゃあ、そーだろ。銃声音はしねえからなぁ。それよりも気分はどうだ？
この武器、光の弾丸を放つエクソシスト特製の祓魔弾はチョー気持ちイイだろぉ？」

くそっ！ヤバいどうすれば・・・。そう考えている間にも神父は銃を俺の方に構える。

「ヒャハハハハハハハハハ！！悪魔は存在する意味な～し。さっさとくたばりやがれ糞野郎！ヒャーハアアアアアア！」

撃たれる！そう思った瞬間、

「・・やめてください！」

そこに一人の女性が割り込んだ。

「・・アーシア？」

割り込んだ人物はアーシアだった。

「・・・イッセーさん？」

向こうは誰とも気付かずにかばってくれたらしい。

嬉しい限りだが危ないよ・・・。

神父はそれを見て、

「なに？　なに？　キミたち知り合い？

ちょーウケル！悪魔とシスターは受け入れることのできない存在なんだよ！！

悪魔とシスターの禁じられた恋？すごいねぇ。ふざけてんじゃねぇよ！」

言い終わると同時にアーシアを剣の柄で殴り倒した。

「アーシア！」

神父が俺に止めを刺そうとしたとき、地面に青白い紋章が光った。

中から出てきたのは木場、小猫ちゃん、朱乃さん、部長そして毬だった。

マリｓｉｄｅ・・・

ふぅ～。お兄ちゃんとは別々に仕事をしてたけど・・・。
いや～、疲れた疲れた♪
お兄ちゃんも帰ってきてるだろうな。
私はスキップしながら部室へと向かった。中へ入ると、

「まずいわね・・・。」

という、リアス部長の声が聞こえた。その声に余裕を感じられなかった。
部屋の中を見ると、お兄ちゃん以外の皆がいた。
何かピリピリしてるけど・・・どうかしたのかな？
・・・はっ！？まさかお兄ちゃんに何かあったのでは！？
私はいてもたってもいられず、リアス部長に訪ねた。

「リアス部長！何かあったんですか！？」

「マリ。えぇ、少し不味いことになったのよ・・・。
朱乃、とりあえずあっちにいくわよ。魔法陣の準備を」

「はい、部長。小猫ちゃん、手伝ってくれるかしら？」

「・・・はい」

部長の指示で、なにやら準備を始める朱乃先輩と子猫ちゃん。
っ！やっぱり何かあったんだ！

「リアス部長！説明をもらえますか？」

「イッセーが襲われてるの」

「えぇ！？」

やっぱり・・・。でも誰に？

「『悪魔払い』にだよ。」

と、いつの間にやら剣を携えた木場君が立っていた。いつの間に・・・。

「『悪魔払い』って、確か・・・」

「神や堕天使によって強力な力を与えられ、悪魔を滅ぼす存在、だよ」

私が思い出すのより先に木場君が答えた。

「あぁ、そうだったそうだった。ありがとう木場君。」

だとすると・・・

「お兄ちゃんが危ないじゃない！！！」

「だから焦ってるのよ」

リアス部長が嘆息しながらいう。

「でも何でわかったんですか？」

「前回、前々回と。契約は破談になるけれど何故か依頼者の評価が

抜群だったから、
どうしてかしらと思って使い魔を使って確認してたの、そしたら――」

「『悪魔払い』が依頼者の家に待ち受けていたんだ」

リアス部長と木場君の懇切丁寧な説明で、お兄ちゃんのことを監視していたということが分かった。
酷い！お兄ちゃんを盗撮していいのは私だけなのに！

「しかしマズいわね。イッセー、大丈夫かしら・・・」

あ、危ない危ない。お兄ちゃんに危機が迫ってるというのに・・・。
心配そうな顔をしているリアス部長。木場君も同様に、少し顔を強ばらせる。
早くしないと！

「部長、準備が整いましたわ」

私とリアス部長、木場君が話をしている間に準備が終わったらしい。
教室の床にはかなりの大きさの魔法陣。

「ありがとう、朱乃。
・・・みんな、あっちには『悪魔払い』がいるわ、戦闘になることは覚悟して。油断しないように！」

「「「「はい！」」」」

私を含めた皆が返事をする。
と、今度は部長が私の方を向く。

「マリ、あなたは・・・」

「『残りなさい』という気ですか・・・。答えを先に言わせてもらいます。絶対いやです。」

私は睨みながら答える。しばしの沈黙が私とリアス部長の間に流れる。

すると、先に口を開いたのはリアス部長だった。

「・・・わかったわ。ただし、足手まといには――――」

「なる気はありません！！」

お兄ちゃんを傷つけた奴は片っ端から・・・。ふふふ。

「――――――いくわよッ！！」

「「「「はいッ！！」」」」

リアス部長のかけ声とともに、全員が魔法陣の上に乗った。

転送が終わると目の前にはおかしな人間と足を抑えたお兄ちゃん、倒れているアーシアちゃんがいた。男は、

「悪魔の団体さんかよ、ヒャハ！」

と言いながら剣を朱乃先輩に振り降ろす。その瞬間、木場君の剣とぶつかった。

ガキィン！

「おっと、そうはいかないよ」

「うぜっぇなぁ！」

木場君と男が打ち合っているとき、後ろからリアス部長がやって来た。

「・・ごめんなさいね、イッセー。

まさか『はぐれ悪魔払エクソシストい』が居たなんて・・その傷どうしたの？」

「あ、これ、撃たれちゃって・・・」

・・・はい？撃たれた？あの神父に？ウタレタオニイチャンガウタレタ・・・。

「・・・・。コロス・・・・。」

私の声がこの空間に酷く寂しく響いた。

リアスｓｉｄｅ・・・

「・・・・。コロス・・・・。」

私の横でマリがつぶやいた。

その瞬間、気が付いたらマリは、はぐれ悪魔払いの懐へもぐりこんでいた。

速い！私はそうとしか感じられなかった。

「クタバレ！」

「あぁ？ぐあぁぁぁぁぁぁ！」

マリが殴った瞬間、はぐれは家の床をぶちぬいて地面にめり込んでいた。

おかしい。あれだけの動きにあれだけのパワー、明らかに『ポーン』ができる動きじゃあない。

プロモーションもできるはずないし・・・。

そう考えていたとき私はおかしな魔力に気付いた。

禍々しい魔力。なぜ気づかなかったのか不思議に思うくらいの量だった。

「なに・・・これ・・・」

「すごい魔力ですね。」

「あらあら・・・。」

皆も感じたらしく、全員冷や汗をかいていた。

私もすごい量の汗をかいているのでしょうね・・・。

そして気付いた。その魔力が―マリから湧いて出てきている《・・・・・・・・・・・・・》ことに。

おかしい。あの子の魔力は普通位のはずなのに・・・。

「不味い！毬が完全にキレた！！早く止めないと！」

「っ！？イッセーどういうこと！？」

「毬があそこまでキレると、相手が壊れるまで暴れます！しかも周りを気にせずに！」

そこまで危険なの！？
マリの方を見ると、
「フザケルナ・・・。フザケルナ・・・。」
ドカッ！バキッ！グシャッ！
「ぐえっ！・・・おごぅ・・・。」
はぐれがすごいことに・・・。
「い、イッセー。あの子を止められるかしら？」
「はい・・・。じゃあ、毬に向かって投げてくれない？子猫ちゃん？」
「わかりました・・・。」
子猫はイッセーを担ぐとマリに向かって放り投げた。
「毬ぃぃぃ！」
どんっ！ごろごろ。ドカンッ！
イッセーはマリに抱きつくとそのまま転がり壁に思いっきりぶつかった。
「お兄ちゃん・・・？え？ふぇ！？」
マリは赤くなるとそのままキュ～という音が鳴りそうな感じで気絶

した。
・・・。私たちは何も言えなかった。
「！？　部長、近くから堕天使が数名近づいています！　このままではこちらが不利です！」
「えっ！？イッセー！　撤退よ！！」
「はい！そうだっ！部長、あの子も！！」
「無理よ！この魔方陣は悪魔しか飛ばせない。」
「でも！」
「諦めなさい！イッセー。子猫！」
子猫にマリとイッセーを抱えさせ魔法陣を起動させた。

7．はぐれは何を見て笑う（後書き）

毬「うにゅ～」
一「治らない・・・。」
君「そうだね・・・。ま、まぁとりあえず次回『シスター、悪魔と遊ぶ』」
一「お楽しみに！」
毬「ふにゅ～」

8．シスター、悪魔と遊ぶ（前書き）

昨日はアップ出来ずに申し訳ございませんでした。

さて今回はすごいことが起こります。

毬の神器。いろんな候補があって悩んでいます。

なのでアンケートを取りたいと思います。

締め切りは明日の朝7時まで

候補は

1．他のアニメの能力のパクリ

2．完全オリジナル

3．両方

の三つです。

どれにしてもチートっぽくなります。

初めてなので間違っていたら指摘をお願いします。

8．シスター、悪魔と遊ぶ

イッセーｓｉｄｅ・・・

「はぁ・・・。」

俺はベンチに座ってため息をついていた。
何故かって？
だってアーシアを助けられず、足も完全に治らずと色々とあり過ぎてショックがでかいんだよ。
そうやって落ち込んでいると、

「イッセーさん・・・？」

と俺の名前を呼ぶ声がした。
誰かと思って顔をあげてみると、そこにはアーシアがいた。

「アーシア・・・？」

え！？何で！？
俺は驚きのあまり勢いよく立ちあがってしまい、足に激痛が走った。

「イッセーさんどうしてここに？」

どうやら俺が痛みに顔をゆがめたことに気づかなかったらしい。
まぁ、余計な心配をかけずに済んだからよかったけど・・・。なんかなぁ・・・。

「アーシアこそどうしてここ『く～』・・・。アーシアもしかして

お腹すいてる？」

アーシアは顔を真っ赤にしてうつむいていた。
かわいいなぁ。アーシア『ぐ～』・・・。
安心したら腹が減っていたことに気付いた。

「とりあえず昼飯にしよっか。」

「はい！」

アーシアが満面の笑みで返事をしてきた。
本当にかわいいなぁ。
とりあえず、俺らは昼飯を食う場所を探しに歩き出した。

～その頃、毬は～

「きゅ～・・・。」

昨晩、一誠に抱きしめられたことによって自分の部屋のベッドの上で絶賛気絶中だった。

俺とアーシアは、とりあえずすぐ近くにあったハンバーガーショップによった。
アーシアはこういう物は初めてらしく食べるのに手こずっていた。
いや～かわいいよ。何度目だろ？

「アーシア。これはこうやって、こうやってかぶりつくんだ。」

俺はアーシアに食べ方を教えた。アーシアはそれを真似して、ハン

バーガーにかぶりついた。

「んむっ！すごい美味しいです！」

うん、良かった。でもさお祈りするのだけはやめて・・・。
本気で死ねるから・・・。
そのあとはゲーセンで遊んだ。
とても楽しかったよ。俺の財布の中から福沢さんが何人消えただろう・・・。
でも、アーシアがとても楽しそうにしていたのでよかった。

最後にアーシアと公園によっていた。

「本当に今日は楽しかったです！イッセーさんにかわいいぬいぐるみも取ってもらって・・・。
今日は本当にありがとうございました。」

「それはよかった」

そう言った瞬間、足元の石につまずいてしまった。

「ととと。っ！いたた・・・。」

「イッセーさん。やっぱり昨日の怪我が痛みますか？」

アーシアが心配そうに聞いてきた。
気が付いていたのか・・・。

「う、うん。少しだけね・・・。」

そう言うとアーシアは、

「その傷見せてもらえませんか？」

「え？あ、あぁ」

俺は言われたとおりにズボンの裾をまくり上げた。
アーシアは俺の足元にかがむと傷口に手をかざした。
すると、アーシアの手元から淡い緑色の光が発生した。
そして、傷がみるみると治っていき、完全に治ったのを見ると、アーシアは手を離した。

「これでどうでしょうか？」

「おっ。おおっ！すげぇよ、アーシア！違和感がなくなったよ！痛みも全然ないぞ！」

本当に何もなかったように傷が消えていた。

「ねぇ、アーシア。これって、神器だよね？」

「はい。そうですけど、どうして知ってるんですか？」

「実は俺も神器持ってるんだ。いまのところは大して役に立ってないけど。」

「イッセーさんも神器持っているんですか！？全然、気付きませんでした。」

アーシアはとても驚いた顔で俺の顔を見てくる。

「でもアーシアの神器すごいな。」

そう言うとアーシアは突然目をうるうるさせるといきなり泣き出した。

え!?何!?俺なんかした!??

俺があたふたとあわてているとアーシアは落ち着いてきたようで、泣くのが止まっていた。

アーシアの目は赤く腫れていた。

「すいません。お見苦しいところを・・・。」

アーシアはそう言ってきた。俺はなぜ泣いていたのか、気になり、

「アーシア。どうしていきなり泣いたんだ?」

と聞いてしまった。

「あ、すいません。実は最初に会った時の話なんですけど・・・。」

そうだった。確かにそういう話を聞いたんだ。

「ごめん・・・。また嫌なこと思い出させて・・・。」

「別に大丈夫です。あのときは、概要だけでしたけど今度はちゃんと説明します。」

そしてアーシアは語り始めた。

聖女から魔女へと変わり果てた優しすぎる少女の物語を・・・。

「――――そうして誰にも庇かばってもらえずに生き場を失った私は、イッセーさん達が知っている『はぐれ悪魔祓エクソシストい』の組織に拾われました」

「・・・」

俺は何も言えなくなった。
概要は聞いていたけど、こんなにひどいものとは思ってもみなかった。

「おかしいだろ・・・。」

俺のつぶやきは誰にも聞こえず空気中に溶けて行った。

「これも試練なんです。
私が全然ダメなシスターなので、こうやって修行を与えてくれるんです。今は我慢の時なんです」

また笑いながらアーシアは口を開く。
まるで自分に言い聞かせるかのように。

「お友達もいつかはたくさんできると思ってますよ。
私、夢があるんです。お友達と一緒にお花を買ったり、本を買ったりして…、おしゃべりして…」

堪え切れなくなったのか、アーシアの口は笑う事が出来ずに歪む。
そしてぽろぽろと涙が頬を流れて行く。
我慢していた感情が一気に溢れだしたのだろう。

俺はアーシアの手を握って、声高らかに宣言してやった

「アーシア、俺が友達になってやる。いや、もう俺はアーシアの友達だ！」

この言葉に、アーシアはきょとんとする。

「あ、悪魔だけど大丈夫。アーシアの命なんて取らないし、代価もいらない！
気軽に遊びたい時に俺を呼べばいい！」

「…どうしてですか？」

「どうしてもこうしてもあるもんか！
今日1日俺とアーシアは遊んだだろう？話しただろう？笑いあっただろう？
なら、俺達はもう友達だ！悪魔だとか人間だとか、神様だとか関係ない！俺達は、友達だ！！」

アーシアが泣きそうな顔になってくる。

「…それは悪魔の契約としてですか？」

「違うさ！俺達は本当の友達になるんだ！訳の分からない事は抜き！
そういう事は無しだ！話したい時に話して、遊びたい時に遊んで、
そうだ、買い物も今度付き合うよ！
本だろうが花だろうが何度でも買いに行こう！　な？」

今この場で俺がアーシアにしてやれる事は少ない。
過去は変えることはできない。だったら今を過去を忘れるくらい楽

しいものにしてやればいい！
アーシアは今まで耐えていた涙をぽろぽろとこぼしていた。

「…イッセーさん。私、世間知らずです」

「これから俺と一緒に町へ繰り出せばいい！」

「…日本語だって、まだうまくしゃべれませんし、文化も分かりませんよ？」

「俺が教えてやるよ！ことわざまで話せるようにしてやらぁ！
俺に任せろ！なんなら日本の文化遺産でも見て回ろうぜ！サムライ！スシ、ゲイシャだぞ！」

「…友達と何をしゃべっていいかも分かりません」

「今日1日、普通に話せたじゃないか。それでいいんだよ。俺はもう友達として話していたんだ。
どうせなら毬とはなせばいい。毬も同じくらいの年齢だから普通に話せるはずさ。
恋の話・おしゃれの話。何でも話せ！あいつも嫌がったりは絶対にしない！」

「…私と友達になってくれるんですか？」

「あぁ、これからもよろしくな、アーシア」

アーシアにそう言うとアーシアは涙を止めることができずに思いっきり泣き始めた。
涙の意味が違うことくらい簡単にわかる。

「アーシア。これからはずっと、ずっと友達だ。」

俺がそう言った瞬間、

「無理よ。」

第三者からの冷たい言葉が放たれた。
俺は声のした方に振り向いた。
そこにいたのは、

「ゆ、夕麻ちゃん・・・？」

俺を殺した夕麻ちゃんだった。

マリside・・・

「うにゅ？・・・ふわ～。」

あれなんで寝てたんだろ？
確か・・・色々あってあのくそったれのカス野郎をぶっ飛ばしてて、
その途中でお兄ちゃんが・・・。
そこまで思い出して私は顔を真っ赤にして悶え始めた。
キャー！お兄ちゃんがお兄ちゃんが・・・。
私は数分間身悶えると、お兄ちゃんの部屋え向かった。

「お兄ちゃ～ん。って、あれ？」

お兄ちゃんの部屋のドアを開け、中に入ってみると誰もいなかった。
とりあえず、ＧＰＳでお兄ちゃんがどこにいるか調べてお兄ちゃん

に会いに向かった。
何故って？そりゃ勿論・・・甘えるためだ！
私はお兄ちゃんの反応があった公園に向かった。
するとお兄ちゃんはこの前会ったアーシアちゃんと一緒にいた。
何故？もしかしてデート！？
油断した！アーシアちゃんが少しお兄ちゃんに恋心を抱いていたのは、女の感で気づいていたが、
まさかこんなに大胆に行動を起こすとは！
急いで妨害しなければ！
そう言って二人のところへ向かっていると、何かが現れた。
何あれ・・・？
そう考えていると

「へぇ。悪魔になって生き返ったんだ。嘘、最悪じゃないの」

という声が聞こえた。
ッ！この声は！このはらわたが煮えくりかえるような声は！

「あの女・・・！」

何でいる。またお兄ちゃんを殺す気か？
フザケルナ
コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス
コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス
コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス
コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス
コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス
コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス
コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス
コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス

コロス

「クソアマァーーーー！！！！！」

私は全力であの女に突っ込んだ。

「ッ！毬！？」

お兄ちゃんが驚いているが気にしている暇はなかった。
あの女は私の突進をギリギリで避けた。
クソッ！
私は空中で体制を変え、地面に足が着いた瞬間あの女に向かって走り出した。

「な、なによ！この女！あ！あなたあの時の！」

女は私のことを思い出したようだが、顔に余裕がみられない。

「シネェェェェェ！！！！！！！」

私は女に向かってパンチを放った。
女はまたギリギリで避けた。
しかし風圧で女は地面に落とされた。

「キャァァァ！！」

女は地面に強く強打されていた。
ッ！しまった！女の近くにはお兄ちゃんがいた。
女もそれに気づいたらしくお兄ちゃんの首筋に光の槍をつきつけて

いた。

「あは、あはははは！これで動けないわよねぇ。ずいぶんと好き勝手やってくれたじゃないの。
すぐには殺さないわ、じっくりいたぶってあげる。あはは！」

このくそ女！！！！
しかし、お兄ちゃんを人質にとられた以上私は動こうにも動けなかった。

ザシュッ

「ガァ！」

女が放った光の槍が私の足の突き刺さった。
痛い・・・。しかも体中に激痛が走りつづけている。

「あはははは！私のこの槍はね、大きさはそこまでなくても光量がすごく多いの。すごい痛むでしょう？
でももっと痛がってもらわないとねぇ！」

そう言って女は複数の小さな光の槍を私に向けて放つ。

ザシュザシュザシュザシュ・・・・・。

永遠と放たれているのか分からないくらいに私の体に光の槍が突き刺さる。
それが止まる気配はない。

「やめろ！頼むからやめてくれ！俺はどうなってもいいから！毬を

攻撃するのをやめてくれ！」

「お願いします！やめてください！何でもしますから！お願いします！」

二人が頼みこんでいる。
女は

「イッセー君少しは自分の状況理解しなさいよ。」

そう言って女はお兄ちゃんの腹に向けて光の槍を放った。

ザシュッ

「ぐぼっ！」

お兄ちゃんの腹に光の槍が突き刺さる。
この・・・クソアマァァ！！！！！！！！！！
私の理性が限界に達しようとしようとする。
しかし、お兄ちゃんの命がまだ脅かされているため、動けない。

「それにアーシアあなたに選択権なんて存在し無いのよ！あははは！」

そう言って女は哄笑していた。
その間にも私の体には光の槍が突き刺さる。
さっきから急所ははずされているので激痛が体中をずっと駆け回っている。

「さて、それじゃあそろそろ死になさい。」

女は冷たくほほ笑むと特大の光の槍を放った。

「毬いいいい！！！！！」

お兄ちゃんの叫びを最後に私の体はこの世から消え去った。

8．シスター、悪魔と遊ぶ（後書き）

君「今回は一人でやらせていただきます。
さてすごい展開になってきました。
ここからの展開ももう頭の中には出ているんですよねぇー。
話替わりましてアンケート。経験不足の筆者のために皆さんご協力お願いしま　す。
さて次回『復讐の名のもとに』
お楽しみに」

9．復讐の名のもとに（前書き）

つっかれた～。
今回はイッセーがかなりヤバい状況です。
今日中に1巻終わらせられたらいいなぁ。

9．復讐の名のもとに

イッセーside・・・

うそ・・・だろ・・・。

「ま・・・り・・・？」

確かに毬はそこにいた。

いたはずなんだ・・・。

「あはははは！どうイッセー君？君のいとしい妹さんは死んじゃったわよ？あはははは！」

夕麻ちゃんが笑いかけてくる。

しかし俺はそんなことを気にする余裕はなかった。

毬が・・・死んだ・・・？

俺はそんな現実を受け入れられなかった。

自分のけがも気にならないくらいに・・・。

「あー面白かった。みじめねぇ。妹を守れなかった兄なんてねぇ。さてと、アーシア教会に戻るわよ。」

「あ・・・。」

アーシアも先ほどまでいた。

自分の友達となってくれた男の妹が死んだということに、何も言えなくなってしまっていた。

「イ、イッセーさんの怪我だけでも治させてくれませんか？」

「別にいいわよ。そんな屑。
その屑の神器は龍の手っていう、
力を倍にすることしかできないありふれた神器よ。別に生きていても危機にはならないわ。
殺す意味がなかったわね。あははは。」

俺はただただぼんやりと聞いていた。
アーシアが聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）みで俺の傷を癒していく。
癒し終えた後アーシアは夕麻ちゃんに連れて行かれた。
俺が取ってあげたぬいぐるみを落として・・・泣きながら・・・。

リアスｓｉｄｅ・・・

部室には私を除いて木場しかいなかった。
ほかの皆はそれぞれ仕事へ向かっている。
しかし、

「それにしても、イッセー君とマリさんは遅いですね。」

そう、イッセーとマリがまだ来ていないのである。
少し心配なので使い魔を出してイッセーを探させた。
数分後、イッセーが公園に伏せている姿で見つかった。

「ん？何でイッセーはそんなところで・・・。」

とりあえず木場と一緒に公園まで転移した。
イッセーはそこにいた。

「イッセー。何で、部室にも来ないでこんなところにいるのかしら？」

しかしイッセーは反応せずにただ何かを黙々と続けていた。

「イッセー君？」

木場も不思議に思ったらしい。

私と木場はイッセーの近くにいって、私は肩をつかんだ。

「イッセー、何をしているの？」

イッセーが顔を上げた。

「「っ！」」

私たち二人は言葉を失った。

イッセーの顔に生気が見えず目の焦点が合っていなかった。

「どうしたの！？イッセー！？」

イッセーは何もこたえずただ地面の土を集め始めた。

何故かその土は周りと比べて黒かった。

いったい何があったのだろう。

「とりあえず戻るわよ」

そう言って木場に魔法陣を起動させた。

部室に戻ると子猫と朱乃が戻っていた。

「部長。一体どうしたんです・・・っ！」
朱乃と子猫もイッセーの異常な状態に気づいたらしい。
「・・・イッセー先輩に何かあったんですか？」
子猫が聞いてくる。
私が答えようとした瞬間、
「ま・・・り・・・。」
イッセーがそう小さくつぶやいた。
「マリ？マリに何かあったの！？答えなさいイッセー！」
私がそう強く聞くと、
「あ、あぁぁぁ。うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！！」
いきなり叫びだし半狂乱状態で暴れだした。
「っ！木場！子猫！イッセーを取り押さえなさい！」
「はい！」
「・・・はい」
木場と子猫によってイッセーは取り押さえられた。
しかしまだ精神状態が落ち着かずとりあえず朱乃に処置させた。
イッセーの両親には『今日は勉強会で友人の家に泊まるそうです。』

と伝えた。

数分後、イッセーが落ち着いたようなので、

「イッセー。一体何があったの？教えてちょうだい。」

イッセーは若干うつろな目をしながら、今日あったことを話し始めた。

アーシアというシスターに会ったこと、一緒に遊んだこと、友達になったこと、

イッセーを殺した堕天使と会ったこと、そして、

「俺が人質に取られて、・・・毬が・・・光の槍で消えっ、消えっ、あああああああああああああ！！！！！！！！！」

「そ、そんな・・・」

「・・・イッセー先輩。」

「・・・」

私たちは知った。マリがこの世から去ったことを・・・。

イッセーは叫んだあと気絶してしまった。

気絶したイッセーをベッドに寝かせた後、私たちは会議を開いた。

「・・・イッセーにとってこれほど辛いものは無いでしょうね・・・。私が付いていれば・・・。」

「部長。自分を責めていても意味ありませんよ。」

「・・・そうです。イッセー先輩の代わりに敵を取ってあげるのが先決です。」

「そうですね。イッセー君のためにも・・・マリさんのためにも。」

「えぇ、そうね。」

そして私たちは堕天使を倒すための作戦を立てた。

マリの復讐のために・・・。

9．復讐の名のもとに（後書き）

君「神器本当にどうしようか・・・。
とりあえず次回『天の采配』
お楽しみに！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6834z/

ハイスクールD×D ~兵藤家の妹?~

2011年12月30日00時49分発行